



## 教育こそ日本の財産

～日本の教育をアジア、そして全世界へ発信～

株式会社フォーバル 代表取締役会長 大久保秀夫

株式会社フォーバルの大久保秀夫会長に、これからの企業の在り方、日本の教育、日本人にとって母語である日本語の重要性についてお話をお伺いしました。大久保秀夫会長は、1980年、25歳で日本工販株式会社（現在の株式会社フォーバル）を設立し、1988年当時の日本最短記録でしかも史上最年少の若さで店頭登録銘柄（現 JASDAQ）として株式を公開しました。その後も、情報通信業界で数々の挑戦を続け、現在、従業員1100名、グループ企業24社を抱えるベンチャー企業に成長させました。また、2008年からは、カンボジアにおける高度人材の育成を支援する「公益財団法人 CIESF（シーセフ）」の理事長に就任し、カンボジアをはじめ、小中高一貫校の育成支援等に力を尽くされています。



※詳細なプロフィールは2頁をご覧ください。

現在、日本で行われている企業活動においては、「経済性」「独自性」「社会性」という優先順位でジャッジメントが下されています。しかし私は、この考え方には大きな問題があると思っています。

第一に「経済性」を重んじるということは、「儲ける」ことが企業の最大の目的になってしまうからです。そうすると、そこにいる人、商品・サービス、その他すべてが「儲ける」ための手段になってしまいます。だから「儲ける」ために平気で人を切り、商品を変え、サービスを劣化させるということが、日常茶飯事のように行われるようになってしまっているのです。いま社会で起きている問題の多くは、ここに原因があるのではないのでしょうか？ 私はそのように考えています。

世界的に見ればリーマン・ショックが最たる例でしょう。国内でも大手一部上場企業による粉飾決算・証券取引法違反で経営者が逮捕された事件、大手メーカーによる巨額の損失隠しなど、大きな社会問題となりました。こういった事件も「儲け第一主義」の弊害が、端的に表れた事例だったのではないかと考えています。

しかし、企業は本来、社会のいろいろな問題を解決するために存在しています。そこに存在価値があるからこそ成り立っているわけです。ですから、そもそも本質として、自社の商品・サービスを通して「どのように社会に貢献することができるか？」という「社会性」こそが、最も大事なのです。

その上で、たとえ他に誰もやっていなくても、それが「本当に社会にとって必要なことだからやるんだ」という「独自性」が求められます。そして、それが最終的に続けられるかどうかは、やはり経済合理性についてもきちんとチェックできていなければいけません。事業を始めてみたものの、中途半端に放棄することとなってしまっただけでは、結局、周りに迷惑をかけてしまうことになるからです。このような事態を避けるためには、「経済性」についてもしっかりと考慮した上でスタートし、きちんと適正な利益を得ることが必要となるのです。

そして企業活動で得た利益を元に、さらに社会貢献をするという循環サイクルを作ることが、公器たる企業の本分と言えるでしょう。日本では古来、こうした考えに基づいて企業経営が行われてきました。

皆さんご存知でしょうか？ 日本には創業100年を超えた企業が26,000社も存在するそうです。続くドイツやイギリスでは2,000社程度しかないということですから、圧倒的な世界一です。なぜ、日本企業だけがこれだけ長い間続いているかということ、聖徳太子の教えである「和を以て貴しとなす」、「足るを知る」精神、近江商人の「三方よし」、あるいは「浮利を追わず」という精神、このように数々の教えが企業経営の中に散りばめられているからであると、私は確信しております。

すなわち、「後進のために」という考え方をもち、きちんと文化の継承、企業ビジョンの継承をしてきたからこそ、これだけ長い間、存続し続けることができているのです。

日本の和食が世界一の長寿国を作ったように、日本の経営は世界一の長寿企業を生んでいるのです。このように考えた時、

長寿の源である和食がユネスコの無形文化遺産に認定されたのと同様に、日本の経営こそ、世界の無形文化遺産になるべきではないでしょうか？私は、この日本式企業経営の在り方こそ、アジアを中心に世界に発信すべきテーマであり、日本が取り組むべき喫緊の課題ではないかと思っています。

そのような中、私が理事長を務める公益財団法人CIESF（シーセフ）では今、カンボジアを中心として、小中高一貫校の育成支援を行おうとしております。これを行う上で最も大切なポイントは、私は日本語であると考えています。日本の文化、在り方を学んでもらうためには、やはり日本語という独自の言語を通してでなければ、真の理解を得ることはできないと確信しているからです。

現在、午前中はカンボジアの教育書にのっつた授業をカンボジア語で行い、午後は私たち日本人の持っている知識や文化を、小学校1年生から日本語で教えていこうというプロジェクトを、カンボジアの教育大臣と一緒に計画しているところです。

同様の取り組みを、今後はラオス、ミャンマーを含めたアジアの国々を中心に、全世界へと発信し、真に日本を理解してくれる若者を作ること、それも日本語を通して理解してもらうことこそが、資源の少ない、少子高齢化を迎える日本を救う、唯一の手立てではないかと思っています。

そのためにも、私たち日本人は、母国語である日本語をより一層、しっかりと学ぶことが大切ではないでしょうか。「日本語検定」は、そのための大きな一助になると、高く評価をしております。グローバル化が叫ばれる今だからこそ、1人でも多くの日本人が、もう一度原点である日本語を見直すことが必要なのだと思います。

ぜひ、日本語という素晴らしい言語を通して、この国の素晴らしさを世界に発信していきたい、このように願ってやまない次第です。

#### 大久保 秀夫（おおくぼ ひでお） プロフィール

1954年、東京都生まれ。國學院大學法学部卒業。大学卒業後、アパレル関係企業、外資系英会話教材販売会社に就職するものの、日本的な年功序列体質や人を使い捨てる経営方針に納得できず退社。1980年、25歳で新日本工販株式会社（現在の株式会社フォーバル）を設立、代表取締役役に就任。電電公社（現NTT）が独占していた電話機市場に一石を投じるため、ビジネスフォン販売に初めてリースを導入し、業界初の10年間無料メンテナンスを実施。1988年、創業後8年2ヶ月という日本最短記録で史上最年少（ともに当時）の若さで店頭登録銘柄（現JASDAQ）として株式を公開。同年、社団法人ニュービジネス協議会から「第1回アントレプレナー大賞」を受賞。その後も、情報通信業界で数々の挑戦を続け、従業員数約1100名、法人クライアント数10万社、上場会社3社を含むグループ企業24社を抱えるベンチャーグループに成長させた。2010年、社長職を退き、代表取締役会長に就任。会長職の傍ら、講演・執筆、国内外を問わずさまざまな社会活動に従事。カンボジアにおける高度人材の育成を支援する「公益財団法人CIESF（シーセフ）」理事長も務める。さらに、NPO法人元気な日本をつくる会 理事長、東京商工会議所特別顧問・中小企業国際展開推進委員会委員長なども務めている。『「社長力」を高める8つの法則』（実業之日本社）、『在り方』（アチーブメント出版）など著書多数。

#### ■経歴

1977年03月 國學院大學法学部卒  
 1977年04月 婦人服メーカー入社  
 1980年09月 株式会社フォーバル（新日本工販株式会社）設立、代表取締役社長に就任  
 1988年11月 社団法人ニュービジネス協議会から第1回アントレプレナー大賞を受賞  
 1991年01月 第16回経済界青年経営者賞を受賞  
 2005年06月 株式会社フォーバル代表取締役会長兼社長に就任  
 2010年06月 株式会社フォーバル代表取締役会長に就任

#### ■著書

『武士道に学ぶビジネスマン48の心得』（東急エージェンシー）  
 『やり抜けば仕事は必ず面白くなる!』（かんき出版）  
 『The 決断』（ワンプルーフ出版）  
 『ディジションメイキング』（ワンプルーフ出版）  
 『幸せをつむぐ会社』（ワンプルーフ出版）  
 『ボーングローバル起業論』（ワンプルーフ出版）  
 『「社長力」を高める8つの法則』（実業之日本社）  
 『在り方』（アチーブメント出版）

#### ■所属団体、社外活動（現任）

1994年09月 社団法人経済同友会 会員  
 2000年10月 日本ベンチャー学会 理事  
 2000年11月 東京商工会議所 1号議員  
 2007年11月 東京商工会議所 渋谷支部 相談役  
 2008年10月 ランチェスター戦略学会 顧問  
 2008年12月 公益財団法人CIESF（シーセフ） 理事長  
 2009年01月 東京世田谷ロータリークラブ 会員  
 2010年03月 社会起業大学 顧問  
 2010年11月 特定非営利活動法人 元気な日本をつくる会 理事長  
 2010年11月 日本商工会議所 特別顧問  
 中小企業国際化支援特別委員会 共同委員長  
 東京商工会議所 特別顧問・常議員  
 中小企業国際展開推進委員会 委員長  
 2011年10月 東京商工連盟 副会長  
 2014年01月 一般社団法人 公益資本主義推進協議会 代表理事（会長）